

川崎八右衛門

明治時代を代表する実業家 茨城町



(『常陽藝文 137号』より転載)

天保5年(1834) - 明治40年(1907)。鹿島郡海老沢村〔茨城町海老沢〕生まれ。本名は守安(川崎家は代々当主が八右衛門を名乗る)。嘉永2年(1849)に家を継ぎ、翌年、加倉井砂山の日新塾に入門し、文武両道に励む。後に水戸藩に財政安定のため鑄銭事業を献策し、鑄銭座の開設に成功する。明治3年(1870)、北海道開拓に従事し、官庁の為替業務を行うようになり、同7年(1874)、川崎組を創設。警視庁・千葉県・茨城県などの公金を扱うようになり、金融業面での才能を發揮する。明治13年(1880)には川崎組を川崎銀行に改組し、三井・安田銀行と並ぶ我が国を代表する私立銀行を誕生させるなど、金融を中心に各種事業に着手。川崎財閥創始者の地位を固める。県内では水戸鉄道の敷設などに尽力したことが知られている。

川崎八右衛門は、^{ひぬま}涸沼の南西岸に位置する^{いちは}鹿島郡海老沢村〔茨城町海老沢〕に生まれました。当時、海老沢村は東北地方と江戸を結ぶ^{おす}物資輸送の拠点の一つでした。川崎家は、水戸藩第2代^{はん}藩主^{とくがわみつとむ}の徳川光圀(P.45 参照)に取り立てられ^{だいたい}代々村役人を務める家柄でした。

八右衛門は、家業の回船^{どんや}問屋を16歳で継ぎますが、翌年には茨城郡成沢村〔水戸市成沢〕に^{かぐら}加倉井砂山(P.17 参照)が開いていた^{にっしんじゅく}日新塾に入門します。この塾の教育科目は多彩で、読書・習字をはじめ^{れきし}歴史・^{へいがく}地理・^{べんじゆつ}兵学・^{ほうじゆつ}剣術・^{ほうじゆつ}砲術などの各科があり、砂山は水戸藩第9代^{とくがわなりあき}藩主^{しんらい}の徳川齊昭(P.43 参照)の信頼も厚かったので、その徳を慕い、^{りょうない}領内からたくさんの人たちが学んでいました。砂山は早くから八右衛門の才能を見抜き、「資産を増やすことについては第一人者だ。」と期待し、二女を八右衛門に嫁がせています。

(これからは、^{きじょう}机上の学問だけでは世の中に役立つ学問こそが、これからの学問だ。)

八右衛門は、常にこう考えていました。そして、水戸藩が^{さいせい}財政の立て直しを図っていることを耳にすると、水戸藩に対して、「全国に通用するお金をつくりましょう。もし、^{ばくふ}幕府の許しが出ないなら、せめて水戸藩内だけで通用するお金をつくりましょう。その仕事をわたしに^{まか}任せてください。」と申し出ます。そして、幕府の許しが出なかったため、水戸藩内で通用するお金をつくることにしました。このように八右衛門は日新塾で学んだ

ことを現実の暮らしの中で生かそうとしました。

明治7年(1874)、八右衛門は^{かわさきぐみ}川崎組をつく



旧川崎銀行ゆかりの建物
(現・東京三菱UFJ銀行水戸支店)

り、為替取扱業を営み、警視庁の公金を取り扱い始めます。いよいよ事業家としての頭角を現すようになったのです。明治8年(1875)には千葉県、明治12年(1879)には茨城県の公金を取り扱うようになり、人々の信用を得た八右衛門は次第に富を蓄えていきました。明治13年(1880)には川崎組を銀行組織とし、川崎銀行と改め、八右衛門は頭取の座につきます。三井・安田銀行と並ぶ我が国を代表する私立銀行の誕生でした。

川崎銀行がスタートし、銀行業が軌道にのると、八右衛門は、(今まで、いろいろな事業に取り組んで、たくさんの財産をつくることができました。これからは、その財産を自分が生まれ育った茨城の発展のために使おう。)と考え、豊富な資金を茨城の発展に役立てる事業に投入します。その一つが水戸鉄道の建設です。

当時、茨城県と東京との間には鉄道がなく、物資の輸送は馬車や水運が主力でした。そこで、現在の小山駅と水戸を結ぶ水戸鉄道をつくろうと資金の一部を役立てました。この鉄道は、その後、経営が日本鉄道に移り、現在は水戸線となりましたが、八右衛門が果たした役割は大きかったといえます。そして、八右衛門は水戸・岩沼〔宮城県〕間を結ぶ鉄道〔常磐線〕の敷設にも資金を提供しました。

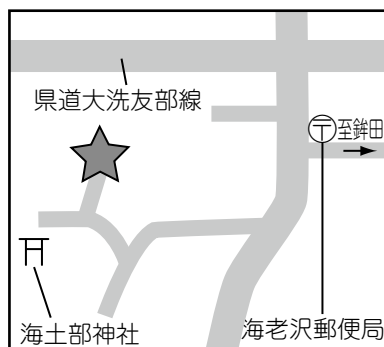
八右衛門は、文字通り明治維新から日本の資本主義の発展を支えた実業家の一人でしたが、明治40年(1907)、73歳でその生涯を閉じました。

ゆがりのスポットに行ってみよう

川崎翁招魂碑

所在地 東茨城郡茨城町海老沢舟山 289

内容 八右衛門の経歴が刻まれ、その業績を称えています。



おもな 参考文献

『常陽藝文1994年10月号』(常陽藝文センター・1994)

『郷土歴史人物大事典茨城』(第一法規出版・1978)